

「国立台湾大学・清華大学派遣参加報告書」

京都大学大学院 文学研究科 修士2年 佐藤 里保

プログラム内容

本プログラムでは、6日間の渡航のうち、国立台湾大学、国立精華大学の両大学とそれぞれカンファレンスを行った。国立台湾大学において、2日間に渡ってKyoto-NTU Graduate Student Colloquiumが行われた。京都大学と国立台湾大学の合同カンファレンスは今回が初めてであり、これからのますますの交流が望まれる。また、国立精華大学では1日のワークショップがあり、そこでは京都大学・精華大学の院生が計8名発表を行った。

学習成果

Kyoto-NTU Graduate Student Colloquiumでは、主観性や自己をテーマとしており、幅広い年代や地域の哲学研究が見られた。発表の中には、地域は異なるものの、報告者の研究目的と近い発表もあり、自身の研究とその発表の比較によって、より双方に対する理解が深まった。

報告者は上述のカンファレンスで近世西洋哲学における主観的な世界観について発表を行った。これまで英語で論文を書いたり発表したりする機会があまり多くなく、報告者にとって良い機会であった。コメンテーターから複数の質問をいただき、その中では、研究の基礎となる概念を改めて問いただす質問や異なる解釈を示すコメントがあった。これらの質問やコメントは自身のこれからの研究の方針に影響を与えた。

また、発表内容だけでなく、英語でのプレゼンテーションの方法や質問の仕方についても多く学ぶことができた。プレゼンテーションにおいては、分析・検討した内容が良ければ誰にでも伝えられるのではなく、特に外国語においては、適切な表現や用語で伝えなければ誤解を生んでしまうということを改めて肌にした。この派遣を通じて、語学能力、特にスピーキング能力を高める必要性を感じた。質疑応答については、これまでその場で質問を出すことが多かったのだが、英語では伝えたい内容がうまく伝わらないこともあった。台湾大学のコメンテーターには事前にコメントをスライドで用意している人も多くみられ、思考の整理や質問に対する時間の短縮となっており、有意義な質疑応答を行っていた。これらの方法を以降の授業や学会等にも参考にしたい。

進路への影響

今回の派遣にあたり、上述したように、自身の研究を深める良い機会となった。また、今回の派遣を通じて、海外短期留学や海外カンファレンスへの積極的な参加も視野に入れるようになった。